

昭和戦中期横浜の都市生活誌（下）

——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（3）昭和15～19年

吉崎 雅規

● はじめに

本連載は横浜市磯子区の時計店に勤めた男性の日記をもとに、昭和戦前期から戦後混乱期にかけての庶民の都市生活の実態を復元することを目的とする。くわえて日記の叙述から、当該期の都市横浜の世相や情景をひとつの地域資料として紹介することも意図している。叙述にあたっては「個人史」の観点から下平政熙^{しもだいらまさひろ}氏という個人を視座に据えて、政熙の人生と社会との関わり、さらにその人生と社会の変化にも留意しながら記述を進めていきたい¹。

本稿が依拠する日記とその筆者下平政熙については本連載第一回で解説をおこなっているが、改めて簡単に触れておく。

下平政熙は大正六年（一九一七）三月十一日、長野県下伊那郡上郷村南条（現飯田市上郷飯沼）に生まれた。昭和五年（一九三〇）一月二十日、横浜市磯子区西根岸町（現磯子区下町）の谷崎時計店に奉公するため来浜し、戦前期は同店に店員として勤める。昭和十九年三月五日に出征、同二十一年五月十七日佐世保に復員し谷崎時計店に復職。昭和二十三年一月二十日、磯子区滝頭町字浜（現磯子区中浜町）で下平時計店として独立する。その後は時計店主として終生をこの地で暮らし、平成六年（一九九四）一月十日に死去した。

日記は昭和五年から平成六年まで全六十六冊

が残されており、出征中の昭和二十年をのぞき、原則として一年に一冊ずつ記されている。日記は政熙の死後、長男の下平修嗣氏が所蔵していたが、平成二十七年に横浜都市発展記念館に寄贈された。

本日記をもとに、筆者は「時計屋さんの昭和日記——青年のみた戦中戦後の横浜」という特別展を平成二十七年に横浜都市発展記念館で実施し、その内容を同タイトルの展示関連書籍で報告した²。

本紀要の連載第一回では昭和五年から十一年、第二回では昭和十二年から十四年の日記の記述より、昭和戦前・戦中期の横浜の都市生活の諸相を叙述してきた³。連載第三回の本稿では、昭和十五年から十九年の日記より同様の検討をおこないたい。

なお、史料（日記等）の引用にあたっては句読点を付加し、吉崎の訂正・補足は〔 〕で示した。（ ）は史料原文に記されているものである。また本稿では原則として敬称を省略した。

1 満洲移民——昭和十五年

下平家の満洲移民

昭和十五年三月三十日、下平政熙は父準太郎からの手紙を受け取り、家族が「満洲」（現中国東北部）に渡るようになったと知った。

1 「個人史」「生活史」についての本稿筆者の捉え方については、本連載第一回の吉崎雅規「昭和戦前期横浜の都市生活誌——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（1）」『横浜都市発展記念館紀要』No.13、二〇一七年、を参照のこと。

2 横浜都市発展記念館編『時計屋さんの昭和日記——青年のみた戦中戦後の横浜』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇一五年

3 前掲吉崎雅規「昭和戦前期横浜の都市生活誌」、同「昭和戦中期横浜の都市生活誌（上）——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（2）昭和12～14年」『横浜都市発展記念館紀要』No.14、二〇一八年

「三十日父よりの便りによれば、一家分散して北滿へ渡ると云ふ手紙がとどいた。父の悲壯な決意と新しい希望を求め、後の後迄も定められた周到なる指導に因づいて大いに商業の目的に向つて進み、一日も早く両親を呼寄せせる可く誓ふ。今後共大いに奮発して兄弟・親子共に協力して、互に励まし合つて慰め合つて行く心掛だ。今まで親をたよりすぎた自分も奮発する」（昭和十五年三月三十一日の次欄）。

四月八日には「父出発との事。無事航行を祈る」と父が満洲へ出発したとの連絡をうけた。父準太郎はまずひとりで満洲に先発して、現地の事情を確認しにいったのである。「恭子よりの便りによれば田舎の家は片付けたとの事」（五月この月）とあり、実家は処分して退路を断つての満洲行きであった。

昭和十一年（一九三六）五月、関東軍司令部は満洲に大規模な開拓移民を送る百万戸移民政策を策定する。貧困にあえぐ農民を村ごと、郡ごとに集団的に移民させる施策である。長野県ではこれに先だつて、拓務省と連絡をとりつつ満洲への移民送出を企てており、県下市町村にその募集を通知する。昭和十八年五月段階で、長野県からの移民は開拓団が五十八・約七〇〇〇戸・二万二〇〇〇人、義勇隊が約五八〇〇人で、それぞれ全国一位であった⁴。なお、義勇隊（青少年義勇軍）は昭和十二年十一月に創設されたもので、十五歳から十八歳までの青少年を満洲に送り、「真ノ建国農民タルニ必要ナル精神ヲ鍛錬陶冶」し、「満洲開拓ヲ促進」することを目的とした。県下の村の新聞にも義勇隊参加への呼びかけがよく掲載されたという⁵。

移民の送出には村単位で開拓団を作る分村移

民と、郡もしくは町村組合を単位として分郷開拓団を形成する方式があった。準太郎は後者の方式の、下伊那郡民から構成される大古洞下伊那郷開拓団に参加することになる。

準太郎はしかし、相当前から自発的に移民を考えていた。政熙が父の死後にその満洲移民について振り返った記述に、「父の性格から云へば開拓事業は昔から計画して居られた。しかし財政難、子供の成長、祖父母の蔭〔隠〕居、不作、等の度重なる負担のため実現する事が出来なかつた」⁶とあり、計画を立てていながらさまざまな事情から移民を実現できなかったことがわかる。

さらに、準太郎が最終的に満洲移民を決断した事情について、政熙は昭和十五年四月の弟財作への手紙に次のように記している。

主に忠孝の就職に就て迷ひ、君の送つた信洲合同新聞により満洲の事情を知り、農業をすれば今の狭い内地では土地がなく、一生苦勞ばかりに終る為、先づ父自身で行つて今の丈夫な中に新開地を開拓し、丈夫な中は共に働いて、勞務にたへなくなったら内地へ歸つて私共の方へ来て下さる親の慈悲で決定し、家屋も古いし他の事情もあるが故郷をすて愛郷心を失はせて、ひたすら満洲の土に愛着させる可くやつた行動と思ひます⁷。

つまり、当該期の国内では小作農であった下平家が農地を得ることは難しく、息子忠孝の就職（就農）を考えて、満洲に農地を求めて父準太郎もともに移民する決断をしたのである。

満洲移民を決断した理由について、下平忠孝氏の聞き取り調査からも補足しておこう。忠孝

4 長野県『長野県史 通史編 第九卷近代三』長野県史刊行会、一九九〇年、四〇六～四一二頁

5 齊藤俊江『満洲移民の送出と開拓地の生活』飯田市歴史研究所編『満洲移民—飯田下伊那からのメッセージ』現代史料出版、二〇〇七年、五十六頁

6 「〔戦前・戦後感慨ノート〕」（4—その他5—1）。「父を偲ぶ」

7 「〔戦前ノート〕」（4—その他5—1—6）。「手紙」。なお、本史料の全文は史料1として本稿末尾に紹介する。

が尋常科六年を卒業した後、父準太郎は飯田の「箕瀬の弘法様」に、忠孝の人生を占ってもらったところ、弘法様は忠孝は農民に向いていると言ったという。はじめ準太郎は義勇隊に忠孝を入隊させることも考えていた。しかし、「義勇隊には心配でやれない」と考えた準太郎は、忠孝を連れて一家ともども満洲に渡ることを決断したという⁸。

政熙の帰省と家族の渡満

昭和十五年八月十四日、政熙は帰省する。満洲に渡る前、最後に田舎で一家ともに過ごそうというわけである。

「新宿発の夜行列車にゆれてうとへとして居る中に白々と夜が明けた。朝の冷気を吸ふて辰野で乗替る。上片桐へ荷物を預け、宮沢君宅へよる。お茶を頂き十時頃共に電車に乗る。元善光寺には待ちくたびれた忠孝の顔が見えた。

〔中略〕狭いたのしい我が家と定めて日俊女との初対面にはびっくりした。孫市様御来訪ある。これで全員揃った。一休みして財作と墓参りして蔭居へ行く」。忠孝は昭和二年生まれの弟。日俊はこの年生まれたばかりの妹、孫市は政熙の叔父（準太郎の弟）である。一家・一族が揃って、「今日の点呼終る。これが第一日なり。喜しいたのしい我が家也」と、久々の対面を政熙は喜んだ。

翌八月十五日。「一同申合せて記念撮影をる〔ママ〕。蔭居へ話し乍ら写真ヤへ行く。輝発買ふ。二時頃蔭居の裏で撮影す。〔中略〕屋敷跡へ行つて見た。田園と化した跡へ道路だけが面影を留めて居た。柿の木もなし。淋しかりけり」。すでに政熙の実家は売却され家も取り壊されていたようである。しかし、政熙は家族との束の間の交流を楽しんで十九日に横浜に

戻った。

十月一日。父より手紙があり、「全員渡満の由」との報知があった。十月七日午後八時、満洲に渡る政熙の家族が、父母に引率されて谷崎時計店に姿を見せた。政熙はのちに、「全員の顔を見た時は悲壮と云はうか何とも表状〔表現力〕出来ない気持であった」⁹と記している。翌日、政熙は家族を案内して横浜をまわった。「渡満部隊を追つて、震災記念館へ行く。一廻りして野毛山公園へ上り、山下町下車。山下公園より港内を臨む。海軍々人上陸。中食をとりて横浜公園にて一休みする。ザキへ出て松屋・野沢屋を見物する。途中帽子とバンド買ふ。八幡橋より海を見せてかへる」。九日、政熙は朝三時に起床。五時に市電に乗って横浜駅に出て、「六時六分大阪行列車に皆乗込む。そろへと動き出す」と一家の旅立ちを「途中無事を」祈りながら見送った。

この後一行は清水で降りて久能山東照宮を観光。準太郎は豊橋の旅館に家族を残して、飯田線で上郷に戻り、渡航証明書を手に入して豊橋で再び家族と合流。敦賀からハルビン丸に乗船し、三日の船旅で羅津に上陸、そこから汽車・汽船を乗り継いで大古洞に到着した¹⁰。

この後政熙の日記には、満洲の家族を案じる記述が散見する。十一月二十一日、「夜北満だよりの放送を聞いて両親弟妹の上を思ふ」。十二月三日、「両親弟妹新大陸に向つてより早二ヶ月になんなんとす。益々健康体を望む也」。昭和十六年一月八日、「自分も親を呼寄せる事が出来る様業務に精励すると共に両親母の健康を祈る」。昭和十六年九月六日、「故郷で見た星、横浜で見る星、満洲で見る星も互の幸なる事伝をたのみたい気がする」と。

政熙の日記からは、満洲移民という近現代史

8 平成二十七年五月の下平忠孝氏よりの聞き取り調査による。なお、忠孝氏はこの後、下平忠孝『農に生きる』二〇一五年（編集協力高瀬雅弘）という自叙伝を出版されており、そのなかで満洲に移民した経緯についても触れられている。

9 「〔戦前ノート〕」（4 - その他 5 - 1 - 6）。「渡満」。なお、本史料の全文は史料2として本稿末尾に紹介する。

10 前掲下平忠孝『農に生きる』

の大きなトピックについても、庶民から見たその実情を知りうる。また、日記の書き手とその家族の人生をともに考えることによって、私たちは当時の歴史像を重層的にとらえることができる¹¹。

紀元二千六百年

昭和十五年は紀元二千六百年である。神武天皇の建国から二千六百年とされ、さまざまな記念行事が実施される。政熙はこの年の「年頭所感」に、「皇紀二千六百年聖紀第四年を迎へ自分もいよへ二十四才となつた。うかへとしては居られない。戦地に働く軍人の様になって芽出度い二千六百年を有意義なる年と致さう」と記した。

満洲に渡る家族を見送った十月九日の夜、「夜サーチライト交叉して美しい観艦式も近づいた」。横浜で実施される紀元二千六百年記念の観艦式の準備がおこなわれていたのである。十月十一日。「皇紀二千六百年記念観艦式横浜にて行はる。我空軍五百機編隊にて堂々通過す」。

十一月九日、紀元二千六百年祝典式の準備が整いつつあった。「奉祝用アンドンも出来た。下町ではアーチも出来、花道も出品され、余興場も出来て、紀元二千六百年大祭の準備万端ととのつた」。

十一月十日が紀元二千六百年式典の当日である。

「午前十時四十分より二千六百年聖紀の祝典が取行はれた。天皇皇后両陛下下行幸啓の下に近衛主〔首〕相発声にて万歳の声が一億国民相和して響き、横須賀方面よりの皇礼砲轟き渡つた」。

この日、式典会場の宮城外苑広場に昭和天皇

が姿をあらわした。近衛文麿首相の発声は、「ラヂオによつて全国に放送せられ全国各地でもこの時刻ラヂオに合わせて一斉に万歳を奉唱」する予定になっていた¹²。横浜でも横浜公園球場において紀元二千六百年奉祝行事がおこなわれ、町内会、中学校生徒、小学校児童、青年団、愛国婦人会、在郷軍人会など二万二千余人が参集した¹³。

谷崎時計店では、午後から仕事を切り上げた。付近の道にも「神輿かついで通る」のが見られた。「夜は素人演芸で舞よう・ハーモニカ、特に□立つアコーデオンの伴奏の歌よう曲・浪花節・主人の手品・歌あり」と、店内でも紀元二千六百年を祝って催し物があった。翌十一日も宴は続いた。「午後一時四十五分よりラヂオの放送にて紀元二千六百年奉祝会の実況を聞く」「夕方店を締め奥の畳間にて店の素人演芸行ふ。なかへ盛大で本当に輪〔愉〕快に終了した。〔中略〕ハーモニカ、歌、手品、尺八をして後、廻しトランプ等をして本当に輪〔愉〕快であつた」。そして、「いよへ明日からは締めてかからう」と宴のあとに気を引き締めるのを政熙は忘れなかった。

なお、紀元二千六百年の祝典について、政熙は別のノートに詳細な記録を残しており、史料3として紹介する。

2 日米開戦——昭和十六～十七年

英米との開戦

昭和十六年十二月八日。「臨時ニュース多し。日本は米英に対し宣戦布告の大命渙発せられ、我陸海軍はハワイ・グワム・フリリツピン・香港・マレー・シンガポールへ続々と交戦し、陽〔揚〕子江では英砲艦撃沈、米艦は降伏

11 なお、下平政熙日記から見える当時の世相と家族の相関関係については、吉崎雅規「昭和前期都市横浜の世相と家族——横浜市磯子区の時計店主の日記から」『横浜市史資料室紀要』第九号、二〇一九年、も参照されたい。

12 『横浜貿易新報』昭和十五年十一月十日付

13 『横浜貿易新報』昭和十五年十一月十一日付

す」「ラジオは臨時ニュース。軍歌が続けられ早くも機先を制す」「正午莊嚴なる君が代に続いて宣戦の大詔が奉読せられた。熱誠を以て感激し一層心の引締るを覚ゆ」。ついにアメリカ・イギリスとの戦争がはじまったのである。

翌九日、「六時半起床直ちに新聞に見入る」。ハワイにおける戦果をラジオから聴く。「ラジオは戦時放送となり、都市は休止で大電力放送中止で雑音多く聞き取れなかったがあらまし分つた」。十一日、「五時新聞が配達された。昨日の英主力艦が大々に掲載されてあつた。六時スイッチをひねりラジオニュースを聞く」。

十五日、「雨が降りつめたい風ではあつたが町内会で皇軍武運長久祈願に参加する。つめたい雨について神前に敬遠なる目〔黙〕 禱。国民儀礼をして、すがへしさを感じて帰る」。

二十日、政熙は夕飯を食べてから同僚三人と横浜宝塚劇場（映画館）へ行く。「文化映画物の観察力・工夫・小国民の化学を教へる。無敵我海軍の堂々と行進演習。米艦、ニュース映画。東条主〔首〕 相の講演、大本營の様子」と時局柄の内容を視聴。しかし、「コロンビア楽園と音丸の歌謡曲。丹下左膳前後完結の映画」と娯楽映画も楽しんで帰った。

二十五日、「九時五十分臨時ニュース。香港は午後五時五十分降伏を申入れたので、七時我軍は停戦す。英国は百年の間栄華をきわめたが、兵器も肉弾と精神力には勝てない」。香港はイギリスの租借地で極東におけるイギリス海軍の基地であつた。しかし、十二月八日の開戦からわずか十八日で香港は日本軍の手に落ちた。

昭和十七年二月十五日にはシンガポールも陥落する。シンガポールはイギリスの東南アジアにおける植民地の重要拠点であり、開戦と同時に山下奉文陸軍中将の猛攻を受ける。「今日国民相等しく待ちに待つた新嘉坡は完全占領の公報に接し皆喜び合つた。皇軍将兵の労苦に感謝

して、益々勝つてかぶとのを〔緒〕をしめて大東亜の建設の決意にもえた」「表の方では万歳の声がきこえて来た」。翌十六日にはシンガポール占領を記念した旗行列が街を練り歩き、十八日正午には、シンガポール陥落の万歳三唱が東条首相の発声でおこなわれた。ラジオは奉祝番組となり、夜には隣組の奉祝演〔宴〕会が店の二階でおこなわれた。横浜の町は緒戦の勝利に沸き上がっていた。

ドウリットル空襲

昭和十七年三月五日、関東に初の空襲警報が発令された。

「八時横須賀鎮守府、南北関東地区に初めて空襲〔襲〕警報が発令された。直ちに修繕は金庫へ仕舞ひ、巻ゲートルを巻き、風呂桶へは水を入れて食事をした。裏の二階から見張りもした。我戦闘機偵察機は二機又は三機編隊で我国土を守つて下さる。九時十分解除となりて仕事に掛る」。欄外には「昨夜南鳥嶋へ空襲」とあり、太平洋上の南鳥嶋に空襲があつたようである。

四月十八日。「午前八時警戒警報発令され、午後0時半空襲警報発令と同時に敵機一機目撃する。高射砲の弾幕の中を低空飛来して中村町・堀の内へ焼夷弾投下する。七、八軒へおちたが死者なし。機敏の処置で大事に至らざりし由。何かひらへおとしたのを見る。初めて見た灰色の大形機がゆるへと飛んで来た時には本当とも思へなかつた。川崎・東京・名古屋・神戸にも飛来したと<三時五十分解除>。高射砲の破片でけがをした人もあつた。皇室御安泰と発表され安心した」。

翌日も空襲警報が発令される。「二時半空襲警報と叫ぶ警防団員の声に目を覚し、身仕度はして見たものゝ、又床の中で待機す。四時頃解除となり、其の仮寝る。六時半起床。昨夜の寝不足も手伝つて仕事はかどらず」「新聞の発表によると東京・横浜・名古屋・和歌山・神戸上

空へ飛来せしとの事。焼夷弾を手でなげ出したり、かよわい女の手で立派に消し止められた等の美談が残る」。本州の東海上にひそかに接近した空母ホーネットから発進したノースアメリカンB二十五爆撃機十六機（ドゥリットル中佐指揮）による日本初空襲であった。

横浜市ではこの空襲を契機として市役所に特設防護団を設置、六月以降は頻繁に防空訓練を実施することになる。訓練には町内会、隣組、警防団などが動員され、十一月の訓練では会社、工場、事業所、アパートなどにも対象が広げられた¹⁴。政熙は六月一日から八月二十九日まで教育召集により横浜を離れており、この間の横浜の様相はうかがえない。しかし、教育召集からもどった九月以降、防空壕を造築する記述が見える。九月十五日、「防空ゴ－〔壕〕を掘り初めたが午後から雨が降つて中止する」。翌日の作業で、「防空壕も半ば完成に近づいた」。そして十八日に「防空壕完成」となったのである。

青年団

青年団は地域で組織され、さまざまな社会的活動をおこなった半官半民の組織である。通常十五歳から三十歳の青年を組織員とし、行政の意向も受けながら地域の青年たちをまとめる役割を果たす。

政熙は来浜当初の昭和五年三月九日に、「青年団の道づくりをした」と道路修繕を手伝った記録があるが、その後はさほど青年団に関わりを持っていなかったようである。しかし、昭和十六年に入ると青年団の活動に本格的に参加することになる。

昭和十六年七月二十八日、「青年団より動員要員調査表が来た」。九月一日、「青年団で八幡社へ行く所へかけ足をして来たので後へつい

て行く」。そして九月五日、「夜青年団来訪、班長をきめて帰る。慰問袋など何事によらず期間・時間の正確な事に驚く。これでこそ異〔翼〕賛青年団を指導する人々の生きた教訓である。我々も出来得る限り一助となるを誓ふ」と記す。九月のまとめ欄で「今までの老青年団に代り今年から正青年団の結成ありて五日近所の班長を依頼さる」とあるので、政熙はこのときに青年団の班長となったようである。

横浜市青年連合団は昭和十一年に大日本連合青年団に加盟。その後横浜市の青年団の正団員数は昭和十一年の一万二七〇〇名から昭和十五年には二万三三五名に増加している¹⁵。地域の青年たちを青年団の活動に参加させる動きが強まっていたのである。

十一月二十一日、政熙のもとに「青少年団暁天動員令」がまわってきた。「明朝滝頭国民学校へ午前五時集合」とのことである。翌二十二日、政熙は「四時半、掛けて置いた目覚時計が二ヶ鳴」って起床した。「外はしとへ」とつめたい雨が降って」いたが仕度を整えて滝頭国民学校へいく。

少年団員、女子青年団が多く、下町からは三名であつた。令旨奉戴、二十一周年記念の荘厳なる式が初まつた。勅語、市長代読等があり、我等青年としての覚悟〔悟〕を新にした。やはり出席してよかったと思った。今迄青年団として参会したるもなく終らうとしたが、雨の中を押して出勤の機会を得て学ぶ所多く、そう然たる横浜市の暁の静けさを破つて工場へ出勤する人々を見て又得る所多し。

時計店の業務に忙殺されていた政熙は、青年団の活動への参加について、社会情勢を知るよい機会ともとらえていた。また、十一月の日記

14 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ』第一巻（下）、横浜市、一九九六年、四四〇頁
15『横浜市史Ⅱ』第一巻（下）、八八六頁

のまとめ欄に「青年団で暁天動員に出動して青年の心の清く強く正しさを認識し」とあるように、同年代の青年たちの心性にも心を打たれるところがあったようだ。

十一月三十日、政熙は青年団で「慰問袋の整理運搬〔搬〕に代表で出るのを依頼」され、十二月四日に、「滝頭青年団下町代表で共進国民小学校へ出動軍人の正月用慰問袋を包送に行く。（英和）女学生が奉仕に来た。内容品を出し、ボール箱へ入れる。ハترون紙で包んで紙をはる。ヒモで荷造りをして切手をはりトラックで発送する。一日中忙しい奉仕であったが、これを受取った軍人が喜ぶ様子を思ひ浮べて四時までに終了した」。青年団では他団体の勤労奉仕活動と共同して、戦地への慰問品発送作業をおこなっていた。

さらに翌昭和十七年一月十一日、政熙は下町青年団の「強歩大会」に参加した。この日、政熙は五時に起床、店の掃除を済ませてから集合場所に六時半に行くがすでに一人もおらず、あとを追いかける。「磯子校より山のハイキングコースへ入る。磯子にもこんな静かな見晴しのよい所があるとは知らなかつた。焼場を過て大久保から山へ入つた」。日切地蔵（現港南区の日限地蔵か）を参拝し、戸塚競馬場で弁当を半分食べ、藤沢遊行寺まで歩く。「足がいたんで来て荷物を持つて頂いたり親切に話をかけて下さる」。さらに江ノ島神社・児玉神社を参拝。帰途は鉄道で横浜に戻り、八幡社へ参拝して帰った。戦時下の青年団はこのように銃後の青年の心身鍛練を目的とする活動を展開していく。政熙も、「皆々九里の道は歩いた。団体訓練もよいものだ。よい所が見られ修養にも身体健全にも役立つ」（一月のまとめ欄）と記し、身体を鍛え見聞を広めるためにも有用と考えていた。

3 統制される生活 ——昭和十七～十九年

企業整備と時計店

政熙は以前から独立開業を考えて時計店に勤務していたようだが、昭和十六年ころから独立に関する記述が日記に散見するようになる。

「店を持つて月商五十円の純益をあげるには今の時勢に並大ていではない」（昭和十六年五月九日）。「高橋材料やの話。元町の某時計店では主人応召後下職をやつて居た人が続けて居るが一日一ヶ平物しか修繕がないと云ふ。開業するには場所をよく見るが必要なり」（昭和十六年九月十七日）。

昭和十七年一月二十日、政熙が昭和五年に谷崎時計店にやってきた記念日である。「今日は店に来た日から満十二年目だ。営業許可は十年以上のけいけん済みの者に組合からあつせんすとか」と、時計店の営業許可（開業）について一定期間の経験者に時計業組合から斡旋するとの記述が見える。しかし、すでに昭和十四年十二月、商工省は小売商の新規開業を原則として禁止する「物品販売業許可制要綱」を発表、横浜の業界も同業者の乱立と過当競走を避けるためにこの要綱の実施を要望している¹⁶。政熙も「転業以外自由開業の出来ない」（昭和十七年二月四日）状況の厳しさは承知していた。さらに昭和十七年三月、商工省は中小商工業者の転業促進基本方針を決定し、すべての産業において転廃業を進め、軍需産業の労働者不足に対応しようとする¹⁷。

十月終わり、政熙は「修繕の上りを調査する余〔予〕定を以て一ヶ月調べた。大物小物合せて百九十七円。これを下職にして計算したら八十六円余であった。体に苦労がなかつたらまだへ出来るはずだ。将来を修繕屋で生活する

16『横浜市史Ⅱ』第一卷（下）、一九二頁

17『横浜市史Ⅱ』第一卷（下）、一〇三二頁

には果して」（昭和十七年十月末尾）と記し、現在担当している時計の修理作業を仮に独立して請け負った場合の収入を計算している。時計店には販売・営業と修繕というふたつの側面があるが、政熙は修繕をメインにおこなうことを希望していたようである。しかしどのような事情か、この年の十二月の日記末尾には、「開業の前途の光明が失はれた」と記しており、独立開業に何らかの大きな障害が発生したようである。

しかし、翌昭和十八年一月二十七日夜、「谷崎時計店廃業して新に裏を修繕工場にするとの話が持上った」。二十九日、「岩間様、徳田様、若旦那と主人寄合つて修繕部の件に就いて協議した。樋口君と自分も仲間入りをして二月十一日から作業始めとなる。張合ありて嬉しい。一ケ八十銭。9時—5時」。つまり、時計修繕専門の工場設立の話が持ち上がったのである。「企業整備も店は残る事となり」（一月末尾）ともあるので、このころ進められていた企業整備（企業の統廃合）にも関わらず谷崎時計店は統廃合を免れたようである。政熙は「技術の練磨にもつてこいだ。今までのなやみも消えて前途に光明を見出した」（一月二十九日）、「どんな結果が現はれて来るか、たのしみも苦しみもあると思ふ。自分はあせらず出来るだけの事をして行きたいと思ふ」（一月末尾）とこのプランを歓迎した。

ところが二月十日、「合同修繕所消滅らしい」とこの話は急に立ち消えとなる。この事情について政熙は、「合同修繕所開所の件は時局下の徴用を恐れてか、一切を精算して工場へ務められるとの岩間様の議案に次で、徳田様も半転業で工場へ務めるとか云ふ話などあり。種々の関係で取止めとなつた」（二月十六日付次の頁の余白）と記している。岩間は時計店を廃業して工場に勤めること、つまり転業することを

提案し、徳田は半転業とって、時計店の業務を継続しつつ空いた時間に工場に働きに出る形態を提案した。いずれにせよ、非軍需産業、かつ中小商工業者の谷崎時計店に勤めていることによって、強引に徴用されることを同僚たちはおそれたのである。同僚は合同修繕所の設立よりも、みずから軍需関係の工場に勤務することを望んでいた。

食糧事情

政熙の日記からは都市横浜の食糧事情が厳しくなっていく状況も見えてくる。本節では昭和十五年にさかのぼって、食糧事情についての記述をまとめてみたい。

昭和十五年七月二十八日、政熙は「国策に副つて副食物生る。ケンチン汁に舌づつみを打つ。米の節約実施」と書いた。三十一日には「節米運動起る」と記す。昭和十二年の日中戦争開戦以来、応召により農村部における働き手が減少しつつあった。さらに横浜市域では、臨海部・内陸の軍需工場が農村地帯から近接していたことから、農業就業者から工場従業員への転業が相次いだ¹⁸。以上の背景から食糧不足がだんだんと顕在化しつつあり、市民はなるべく米の摂取を控えるよう指示されていた。

昭和十六年の元旦は「よく晴れた正月だ」だった。「おとそ、ごまめ（たづくり）、午ぼう、人参、数の子、はす、等々、いつも出る品は毎年同じだ。雑煮のおいしさ例へ様なし。翼賛会の実施で一人一升の割での配給の餅だ」とあって、餅は配給されたものだったという。一月三十日、「非常時日本。英米との間に大〔太〕平洋の波高からんとして居る。節米運動初まり今迄より代用食頂く様になる」。二月二日、「お昼はパンなり。節米も実施し強化さる」。二月三日、「節分も代用豆入りなり」。二月五日「うどん・いも・するとんを交へ節米実施

18『横浜市史Ⅱ』第一巻（下）、七七二頁以下

す」。主食である米の割当配給制が六大都市で実施に移されるのはこの年の四月である。

昭和十六年六月二十一日には配給の米について、「外米五、日米三、小麦一と、もち米の一の割とか」と米穀の配合割合について記す。しかし、「政府は色々に苦心しても御飯を戴ける様に計らつて頂けると思ふと有難い」と政熙は政府に感謝の気持ちを記している。

昭和十七年一月三十日、「近頃の配給米日本米でおいしいので喰込みとの事」。二月十四日、「夕飯は茶わん一ぱいにするとん也」。二月二十四日には一日の献立が記される。「朝井・味噌汁・沢あん。昼井・玉菜・つけ・のり。夕かゆ・竿入」。二月を振り返った記述では「米が不足でかゆになつた」とあり、このころから米不足がさらに顕在化したようでもある。三月十六日、「朝井味噌汁。昼井・菜のごまよ□し・つけ菜。夜井かゆ・豆・菜」。しかし「料理の労苦を察す」と政熙は記す。翌十七日には、空腹からか「ゴトウ虫焼いてたべた。気味悪し」ともある。三月二十八日には、「今日から御飯へとうもろこしが入つた。外米六、モロコシー、日米三の割とか」とトウモロコシが米に混じったことを記す。四月十六日、「日が永くなるに従つて空腹を感じる様になる」。

昭和十八年一月二十四日。「夕飯にしるこ頂く。久しぶりであまい物を御馳走になつた」。砂糖の配給も足りていなかった。七月二十九日の日記には「近頃米代用食としてかぼちや・架〔茄〕子が多量に配給される」と、また「代用食として茄子・南瓜・大豆・馬□しよ〔馬鈴薯〕等が配給さる」（七月末尾）との記述もあり、米の代用として配給された野菜が具体的にわかる。しかし、政熙は「こうしてまでも食糧確保に計らつてくれる政府の政策に感謝し、常に戦場にありの覚悟を深くして、一層大東亜戦争に勝ちぬく為奮闘しやう」と記し、あくまでも日記に食事の不満を記すことはなかった。

自家生産と畑

谷崎時計店ではこのような食糧事情の悪化にもなつて、近所の「山の上」に畑を借りて野菜の栽培をはじめた。畑の正確な位置は不明だが、昭和十六年三月十六日の日記に「店の二階から手をふつて話をするのが聞きとれた」とあり、また同年九月八日の日記に、「主人と畠へ行き六地藏上より水を運ぶ」とあることから、谷崎時計店からほど近い、現在米軍根岸住宅となっている現中区塚越の丘の上あたりに所在したと思われる。「忙しく走る自動車も電車も蟻のはふが如く見える。〔中略〕磯子区が一瞬の中に収まりて美しさいはん方なし」（昭和十六年五月十四日）という眺めのよい場所であった。

昭和十五年六月二十日。政熙は定休日である。「夕方山の上の畑へ行つて見た。野菜は色々あつたがなんと情ないことよ、勿論初めからうまく行くはずもない。とまとの木が良い方で、次に大根、所々になす、菜、芽を出し初めた。しょうが情ないのは虫に喰はれたしまうりであつた。さつまいもを植えた。静かな畑の中でたのしくすごした」。谷崎時計店ではこの頃から畑での自家栽培を開始し、食用となる大根・なす・薩摩芋などを植えたようである。

昭和十六年三月十六日。「金子屋から芋の種を買つて来る。仕度して山の開墾畑へ行つた。万竹の根のはびこつた所をトンガを以て掘り返した。はだかになつて力をこめて打ち下す。サクと音をたてて根が切れる。新しい土が盛り上がる。大〔太〕陽を浴びて土に親しむのものたのしみだ。互〔瓦〕、石、根、のじやま物を掘り返し、一坪以上やつた。〔中略〕芋をまいて二時帰る」。政熙はこの日珍しく俳句を詠む。「開墾で トンガ持つ手に 豆三つ」。三月二十一日にも政熙は芋の種を蒔いた。「朝食の後山の畠へ行く。肥料・芋の種を運ぶ。自転車を押上げて笹藪を刈る。上の屋敷跡を掘る。道路をこしらへる。芋をまく。汗にまみれ陽光を浴

び、お昼はぼた餅の配給あり」。五月五日には畑作業をしながら、「砲兵の山嶽戦もこれ以上かと思つた」と戦地に思いを馳せている。

この時代の食糧の窮乏と厳しい配給生活はよく知られている。しかし、政熙はその食糧難を解決するための畑作業について、「こうして丹精した成果を見乍ら土に親しむ機会を得た喜び」（昭和十八年六月二十七日）とも記しており、野外での作業が政熙には愉しみにもなっていたようである。

戦争の進展と世相

根岸湾に面した富岡（金沢区）には昭和十二年から海軍の横浜航空隊が配置されており、政熙は航空機の演習の様子を間近で見ることができた。昭和十八年三月十六日「夜間飛行で猛訓練をやつて居る」。六月四日、「晴れた大空をすれへに飛行ぶ四発飛行艇の響もすごく着水の姿勢をとつて居る」。八月八日、「久しぶりで中根岸へ遊泳に行く。沖の方まで泳いで遊ぶ。飛行艇が波に浮んで居り遠く着水するのを見る」。昭和十九年一月十九日、「窓より目に映るは着水直前の飛行艇 耳に聞ゆる音は何処へ運ばれて行くのか戦車の響」。横浜郊外に住む政熙だが、兵器の響きが耳に入っていたのである。

昭和十八年二月九日、政熙は「ソロモン群島の血の出る様な戦況発表」を聞いた。大きな損害を出したガダルカナル島の攻略を諦めた日本軍は、二月一日から七日にかけて撤退作戦をおこなったのである。四月二日、「ガダルカナル戦記の朗読」を聞いた政熙は、「皇軍の死闘の有様」を知り感激する。このようななか四月十三日、政熙は「銀貨及其他余〔予〕備金を応召の気持にて大部分貯蓄へ振向ける」と記す。戦費の調達のため政府は国民に貯蓄を奨励していた。横浜市も町内会と一体になった貯蓄組合

を各地域に結成させ、目標額を設定して各自に割当てをおこなうなど、「地域からの圧力」によって強制的に貯蓄を進めさせていた¹⁹。

五月二十一日、山本五十六大将の戦死が発表された。翌日の新聞は「山本元帥の記事充滿す」。ソロモン諸島の前線を視察中の連合艦隊司令長官山本五十六は四月一八日、ブーゲンビル島の上空で搭乗機が米軍の待ち伏せにあつて撃墜されたのである。六月五日「山本元帥国葬の放送を聞き十時五十分目〔黙〕禱す。歌舞音楽停止。女学生婦人はモンペ姿もりゝしく、男子は脛脚畔の雄姿にて道を通るにも時局柄」。六月十二日、「夜ニニューギニアの敵火砲陳地をちんもくせしめたる工兵二十九勇士の行動が朗読せられた」。

この年の七夕。「けん手、織女星の幸あれと表へ出て見た天の川ははつきり見えず。昭〔照〕空灯が方々から照らされて我々の上空を護つて居て下さつた」。七月十三日の盆。「盆が来た。幼なき頃を思い出して……今は決戦下だ。うんと働かう護国の神を迎へて……故郷に向つて拝礼す〔…はママ〕」。七月十五日、政熙は防毒マスク（「防毒面」）を注文する。「防毒面注文す。しかし命が惜しいとは思はぬが被害をうけて国家の御奉公が出来ぬとあつては申し訳ない。身は軍人だ。いづどこで散るとも限らぬが国の為果したい」との思いからであった。

十一月五日と九日にはブーゲンビル島沖海戦の戦果が発表され、「ハワイ海戦以来の大戦果」と政熙は書き留める。十一月二十九日「出陣〔陣〕学徒続々と出発する」。十二月三日、「来栖大使の講演を聞き、米国の勝手な横暴なる態度を聞き、いかなる事があらうともたゞきのめさずには置けないとつよく感じた」。戦局はすでに不利に進展しつつあったが、政府は国民の士気を高揚させようと試みていた。

19『横浜市史Ⅱ』第一巻（下）、八五八～八五九頁

政熙の出征

昭和十八年十二月二十八日、「若旦那へ臨時召集下命。一月六日川崎市馬絹東部六十二部隊へ入隊の令状とどく。自分も間もない事であらう。それまでは全力をささげて修繕技術練磨する事にしよう」。政熙と親しかった「若旦那」谷崎英雄について召集令状が届いたのである。

昭和十九年の元旦、政熙は次のように過ごした。

五時自動スイッチの目覚によりラジオが鳴り目が覚めた。訓練服をまとい顔を洗ひ坂下橋際へ集合す。軍人会磯子第一分会は代和商会前へ集合。完結してこれより伊勢山皇大神宮へ向けて行進は開始した。途中軍歌演習を行ひ乍らハマの日本橋を渡り伊勢佐木町から野毛山を上つた。打続く参拝の人及各団体に交つて拝殿へ横隊に並んだ。〔中略〕終つて大鳥居まで来て御来光を拝した。ラツパの行進、軍歌演習、及駆足行進をしてかへり、坂下橋で解散した。根岸八幡社へ参拝して帰り、福茶・おぞうに酒を祝つて新年の挨拶を交した。

一月五日、政熙は若旦那の「歓送会の式場へ呼ばれる。七時頃根岸八幡社にて歓送式を行ひ行進して店へ入る」。一月六日。「若旦那六時自宅御出発。局前まで送る。祈武運長久」「若旦那の居ない机の上は淋しい。しかし約束をした事を思ひ出した。自分の分まで軍務に精励して頂き若旦那の分まで働く事を」。信頼を寄せている英雄との別れは政熙にショックを与えたようである。

二月二十一日、トラック島の戦果が発表された。二十三日、仕事に疲れて窓の外の雲を見た

政熙には、それが南方の嶋のようにも、敵と交戦する弾幕にも見えた。懐かしい戦友が密林のなかに通信を架設する妄想をした。

三月一日。「夕飯を頂き仕事に掛つて居ると電報にて応召の通報来る」。政熙にもついに召集がかかったのである。政熙の心は「米英撃滅の闘魂にもえ立」った。翌二日、政熙は川崎の鋼管会社へ叔父〔孫子〕を尋ね、出征に関してもろもろの相談をした。そこで「田舎は帰らぬ事」を決め、荷物は叔父に預かってもらうことにした。通帳も妹久保を通じ叔父に預ける。帰りに電報を故郷・南条に打った。四日、「荷物は梱包して出発準備よし。送別会開いて下さつた」。

三月五日。「隣組へ挨拶して雪の降る中を主人・昭ちゃん・見晴しの叔父様に附沿はれて出発」し²⁰、陸軍東部第十五部隊に午後一時に入った。「体格検査もパスして上製軍服を着用して見晴しの叔父様に面会して軍人となる」。これが戦中期の日記の最後の記載である。

20 戸塚町の小糸四郎に宛てて昭和十九年六月一日までの入営を指示した文書（「現役入営（団）ニ関スル示達」。横浜市史資料室蔵小糸光子家資料）によれば、以前は認められていた付添人や見送人の同行は「厳禁」と記されているという。羽田博昭「兵士となった市民の戦争体験—都市横浜の戦争—」『横浜市史資料室紀要』第七号、二〇一七年

◆史料編

史料1 弟財作への手紙

手紙 昭和十五年四月

財作君御便り有難ふ。君の決意の程よく分りませぬ。色々と混合つた事情もありますが私の意見を記入して見ませう。しかし決して感情を害さないで聞いて下さい。

一、父渡満に就て これには色々の事情もあらうとは思ひますが、主に忠孝の就職に就て迷ひ、君の送つた信洲合同新聞により満洲の事情を知り、農業をすれば今の狭い内地では土地がなく一生苦勞ばかりに終る為、先づ父自身で行つて今の丈夫な中に新開地を開拓し、丈夫な中は共に働いて、勞務にたへなくなつたら内地へ歸つて、私共の方へ来て下さる親の慈悲で決定し、家屋も古いし他の事情もあるが、故郷をすて愛郷心を失はせてひたすら満洲の土に愛着させる可くやつた行動と思ひます。

一、君の場合は本当に有難いが、父は決して其の積りではなさうだと思ひます。五年の後の事ですから国家の事情は如何に変化するとも限りませぬし、又父も向ふで如何になり助けを呼ぶ様になるとも限りませぬ。私は父母が賛成ならいつでも喜んで送ります。

軍隊も兵科も志願の外は自分の希望通りに行くかは分りませぬが、今後どうなるかも分らない事ですから資格がないと思つたら、くよへ考へずに今の商売に専心した方がよいと思ひます。

一、今の情勢では商業はほとんど独立は望めない状態です。私はたとへ事業に失墜〔敗〕しても今の商売を遂行します。

資本金は自分の少い給料よりの貯金の外には他人の援助は受けないでやつて行く積りです。大きな商売は勿論出来るはずはありません。自分

で土台から築き上げてこそたのしみもあると思ひます。

一、君に望むのはたとへ古本屋で□好自分と共に新開地をさがし、二人共力を合せて各自の職業に邁進する様心掛けませう。

一、今迄口約束はあつても主人より店を出してもらふと云ふ依頼心は捨ててかかりませう。これも大切と思ひます。月々僅かの小使〔遣〕を貯めて、纏めたお金で店を開く様に心掛け、若し援助して下さいればそれだけ仕合せと思ひませう。

私の考へでは、丈夫な中は小さい弟の為幾町歩かは分らぬが土地を与へ、読書好きな父は余生を内地で送らうと考へるのだと思ひます。親の最後のめんどうを見るのは兄として私の義務だから、私も其の積りです。

兄弟は一人も養子にはやらない心掛です。父は祖父母を蔭居させて負債一切を引受けて親孝行をした。

父の兄弟は各自の力で独立して立派にやつて居られる。

私共兄弟も苦しい時には助け合ひ、共に一丸となつて自分の職業に独立して生活の安定をたてるのが孝行であり、国家の為東亜の大業の為になると思ひます。今後一戦〔線〕に立って一家を援助して、僕の貯金を充分にさせて呉れて居る久保・恭子に感謝の意を表して居ります。

昭和十六年五月八日写ス²¹

*下平財作は大正十年（一九二一）生まれの政熙の弟。本屋に勤め独立することを望んでいたが、海軍に志願し、昭和十九年にサイパンで戦死する。

21「〔戦前ノート〕」（4-その他5-1-6）。「手紙」

史料2 家族、満洲へ

渡満

昭和十五年拾月七日。午後八時頃我一家渡満する者は両親に引卒〔率〕され重い荷物を背負って横浜を尋ねて来た。

全員の顔を見た時は悲壯と云はうか何とも表状〔ママ〕出来ない気持であった。

荷物を置いて奥へ泊めて頂いた。

自分は桜木駅へ行つて来た。

誰を見ても皆元気な顔の中に日巷が一人病気上りであった。

戦帽に短い着物を着た父の姿も一年半ぶりで、会ふ事が出来て嬉しいやら心配なやら分らなくなってしまうた。

弟妹はつかれて居てすぐ眠った。自分は父に色々尋ねたいが喜つかれて居ると察して父と並んで眠た。時々風邪をひいたかせきをした。そつとふとんを掛けてもすぐ外して仕舞つた。自分だけは眠つかれなかつた。

明るく日は横浜見物に出かけた後を追つて震災記念館へ行つた。皆の案内を引受けて父は一人で出掛けた。そこを出て山下公園へ行つた。棧橋又四号岩□〔岸壁〕には新田丸其他の船が着いて居たが、永歩き出来ないで公園の中から説明をした。紀元二千六百年記念観艦式の為集つた軍艦より水兵の上陸を見せた。弟たちはとてもはしやいで喜んだ。

県庁前から日本大通りを説明し乍ら、途中お昼を（玉井）御馳走して横浜公園へ入つた。音楽堂で一休みした。母よりは蔭居の祖母様より戴いた反物で着物を造るに就ての費用を下さると云はれたが御返しした。りんごを買って来てたべた。忠孝・博照・日巷は物をかくしてさがしてはさわいで遊んで居た。忠孝が見えなくなつたのでさがすと木の上へ上つて運動会を見て居た。

そこを出て伊勢佐木町へ入つた。松屋、野沢屋のエレベーターにのつた。屋上では木馬にのつてとても茶目ぶりを発輝〔揮〕しておもしろかつた。

土産として忠孝にズボンのバンドを、博照に学帽を買つた。日巷は一日中おぶつて見物に廻つた。帰りに八幡橋で下りて芝生海岸を見せた。南洋行の飛行艇を見て帰る。

もう一晚泊めて戴いた。御主人より厚いもてなしに預つて感謝した。

父よりは家の事情を一切聞いた。負債は一切整理して浜井町の叔父様より五十円丈と云ふ事だ。満洲への送金は久保の分だけで恭子のは貯めて置く様になつて居るとの事であつた。財作の兵役の事は矢作田へ御願ひして来たとの事であつた。

自分の四分の一制度は三分の一製度〔ママ〕に改める様に云はれた。

子供の独立を又成長をたのしみ乍ら働く親の心の中を察して互の成功を祈つた。

三時頃より起きて尽きぬ教訓及話を聞いた。そろへと白む頃、仕度して主人に御挨拶申上げて横浜駅まで送つた。

弟妹へは心ばかりの錢〔錢〕別を送り、父へは汗の結晶二十円を万一の場合の費用に御渡しした。

午前六時六分「元氣で行つて下さい」「皆様によろしく」の言葉を残して列車は動き出した。十月十一日横浜では二千六百年記念観艦式の日に出発して日本海を越えて満洲国に碇をすえた。これぞ我が国の国是として開拓の事業に、食料の増産に乗出し、広野を開発し高度国防国家の完遂に、紀元二千六百年記念として第一歩を進めた記念すべき日である。

十六年七月十六日写ス²²

22 「戦前ノート」(4-その他5-1-6)。「渡満」

史料3 紀元2600年の祝典

紀元二千六百年祝典

国民相等しく万端準備を整へて待つた。奉祝の日は来た。長期戦下自粛した生活も当局の親心で大々的に祭典が許された。宮城前の式場の様子が放送された。ここに畏くも天皇皇后両陛下の御親臨を仰ぎ奉り莊嚴なる祝典が行はれた。国家及二千六百年奉公歌が合唱せられ、全国より集つた代表者二十万の合唱に続いて、畏くも優くなる勅語を賜はり、近衛首相奉答申上げて後近衛首相の発声で、天皇皇后両陛下の万歳の声は一億の民相等しく調和して津々浦々に響き渡つた。

町内の様子を見出せば、奥に仕舞はれて居た神輿も今日ばかりは血氣盛りの氏子によってかつき出され、わつしよへともみ合つて元気よく通り過ぎた。

坂下町ではプ〔ブ〕ラスバンドを先頭に町内の旗行列が行はれた。軍人会では記念事業として戦没軍人の慰霊祭が行はれた。婦人部は腕によりをかけて生花を並べて奥床しい処を見せ、人々を立止らせて居る。下町会では演芸場を設置して飛入り自由で舞踊、ハーモニカ独奏・手品、歌、魚やの六さんの浪花節、物まね、劔撃等に、特に若人を喜ばせたのは手風琴の伴奏で歌□〔謡〕曲であった。

店では奉祝のあんどんが造られ夜は奥で演芸会を開いた。武君の芸人やハーモニカも奏せられた。

この盛大にして記念すべき二千六百年に生をうけた喜びを永遠に記念して、我々は益々国威発揚に心掛けて筆を置く。²³

* 史料番号に続くタイトルは吉崎が付したものである。

<附記>

本日記ならびに関連資料の紹介にあたっては下平政熙氏の長男・下平修嗣氏より、ご理解ならびにご助言をいただいた。心よりお礼を申し上げたい。

また、本日記にかかわる様々な事実を教えていただいた下平忠孝氏、アリガ・キミコ（紀美子）氏、渥美紳一氏にも深くお礼を申し上げる。

23 「〔戦前ノート〕」（4 - その他5 - 1 - 6）。「紀元二千六百年祝典」